

「社会科教育法」教育の教授方法に関する研究（3）
「受講者ノート」の活用を中心として

大 橋 忠 正

**A Study on Social Studies Teaching Methodology (3)
Utilizing “Lecture Notebooks”**

Tadamasa OHASHI

Abstract

There are five crucial principles in the course of learning and teaching Social Studies. First of all, it is necessary for each student to have good understanding of the subject. Achieving this enables teachers to plan how to present each material, and this will lead to help students educate themselves. Secondly, it is important to maintain Tri-Directional Communication. Instructors give each material to the students in class, and students take notes of each lecture on their Lecture Notebooks. Then the Lecture Notebooks are collected and returned to the students with the instructor's suggestions and evaluations. These three steps as a whole are called Tri-Directional. This process involves a lot of work for both instructors and the students, but it is vital to keep this active. Students will develop their fundamental ability to state their ideas by keeping Lecture Notebooks. Moreover, Lecture Notebooks provide the opportunity for instructors to understand their students in their Social Studies Teaching Methodology classes. The third principle is to expedite students' ability to educate themselves on their own. Students' self-development will be triggered by the interaction through teaching and learning. The ability to educate themselves is essential for their self-development. The fourth principle lies in the aim of the course of learning and teaching, which is to build up their motivation for study and to cultivate their learning skills. Then the fifth principle is to promote and enhance the class as a study group. Each class is most desirable when it is a study group whose members share the same goal, which is to learn and study the subject, and help each other achieve the goal. Without this, it is difficult to achieve efficient learning. For these five principles, the Lecture Notebooks play an important and vital role. How important each principle is in the course of learning and teaching in Social Studies Teaching Methodology and what key role the Lecture Notebook plays is shown in detail in this paper.

Key words

Teaching-learning process, Lecture Notebooks, Understanding students in Social Studies class, Maintaining Tri-Directional Communication, Self-actualization, Self-educating ability, Growth of study class, A fundamental ability to state one's ideas

I 問題の所在

今日、大学教育における学生の基礎学力が問題になっている。その実態は教育実習など学校現場で露呈されることが多い。教育実習後の管理職、関係教員の総評によると、「言葉が適切に使えない、単語のやりとり、自分の思いや考えを述べきれない」など語彙力、論述の稚拙さを含む基礎学力不足が指摘されている⁽¹⁾。本学では、それに対応した授業科目の設置もあるが、抜本的には大学授業全体に見直しが迫られている。

大学授業の在り方への関心は、各大学に広がってから久しい⁽²⁾。大学の大量化、更には大学全入時代と社会変化を遂げる中で⁽³⁾、講義運営もそれに対応していかななくてはならない。大学では典型的だとされる講義形式の授業は、工夫をしないと多数の学生の興味・関心、理解の習得を得るには限界がある。かつて授業中の私語が社会問題化したのもそうした結果の表れといつてよい⁽⁴⁾。

教員養成大学・学部にあつては、こうした問題への対処を教師教育の視点から再考する必要がある。講義法は「短時間に大量の知識・情報を系統的に受講者全員に等しく提示できる利点がある反面、傍観的になりやすく、授業に積極的に参加する学生と参加しない学生との二極分解にも陥りやすい欠点がある⁽⁵⁾」。この授業方法の特徴にも目を向け、教師になるための資質・力量を在学中にどれだけ高めることができるか。教師教育に役立つ授業内容、授業方法と学生の積極的参加態度を促す授業改善が求められている。

大学の教職課程の役割は「教科指導、生徒指導等に関する最小限必要な資質能力の育成」にあり、その再検討も行われてきた⁽⁶⁾。一方、多岐に及ぶ大学改革構想の中で、大学授業の活性化と学習の質的向上を意図したものに大学授業における双方向型評価への取り組みがある。日常の教授・学習活動を活性化し学習の質的向上を図るには授業における学生及び教員の相互コミュニケーションを高めることが第一であるとの考え方である⁽⁷⁾。この「一方通行でない授業への試み」については長年の実践に基づく同表題の提言もある⁽⁸⁾。このコミュニケーション重視の大学授業活性化の視点は妥当であり、教職課程の教科指導に関する資質能力の原点もここにあると考えてよい。従って、教員養成大学・学部で学ぶ学生には、授業の中で教授内容と共にコミュニケーションを重視した教授方法についても、合わせて体験、習得が図られなくてはならない。

本小論は、以上の問題意識に立ち、教師教育を意図した「社会科教育法」教育の教授方法に関する実践的継続研究である。筆者は、これまで社会科教育法の授業内容に対して、学生が主体的な認識、能力を持ち、意欲的に実践態度を身につけるようになることをねらいとして、授業における「受講者ノート」活用の機能の究明に取り組んできた。今回はその原理の整理と、新たに学生の論理的思考・記述の基礎学力（以後、論述基礎力と記す）育成に資する「受講者ノート」の有効性について明らかにする。

II 「社会科教育法」教育における「受講者ノート」活用の構想

1 研究経過

「受講者ノート」とは、個別적으로는、授業者の講義内容に対する受講者の主体的な認識、思考、意見等を記す用紙と全体的には、その内容からなる印刷物をいう。毎回、講義終了10～15分前に記述させ、その内容の主なものを十数名選んでは印刷、翌週、個別の用紙の返却と共に受講者全

員に配布(A4サイズ2枚)している受講者の反応記録である。

これまで14年間(現在も実施),その間2回(1994,1998年)小論にして発表,そこで明らかにした「受講者ノート」活用の成果は,一端を記すと次の通りである⁹⁾。

- 1 個別の学習者理解
 - 2 三方向の授業のコミュニケーションの維持
 - 3 メタ認知による授業内容の構造的把握と自己教育性の促進
 - 4 教師と学生の協同構成による授業の志向
 - 5 自己表現,他者表現の受容活動と授業評価,教職への関心・意欲の喚起
 - 6 主体的な受講姿勢・態度の発展と受講集団のモラルの高揚
- 2 大規模「社会科教育法」教育における「受講者ノート」活用の構想

本学「社会科教育法」教育実施の特色は,多数の学生の受講(前期3クラス二百余名,後期2クラス百五十余名)にある。それゆえ,上記の成果の検証が一層期待され,合わせて,多様な受講者への対応・個別的な指導が求められる。そこで,「受講者ノート」活用の目的と方法を次のように設定する。

(1)「受講者ノート」活用の理論の検証

授業とは,教師,学習者,教材の三者で構成される。教材に媒介された教師と学習者の相互主体的な活動過程が授業の本質である。その中核は教授・学習過程(teaching-learning process)にあり,教師の教授活動と生徒の学習活動との協同により成り立つ授業の過程である。その教授・学習過程には次の原理が付随し,「受講者ノート」にはその原理を起動させる機能がある。

1 教授・学習過程成立の「学習者理解の原理」

教育は対象の理解に始まる。教授活動には,まず,対象である学習者理解が前提となる。三百名を越す学生が対象の場合も例外ではない。授業計画実施の期間中,各学生の受講反応ノートを継続的に捉えると,当人の筆跡,文体等外的表現の特徴のほか,授業内容の理解,能力,態度に関する学力評価,及び,内的特徴である認知傾向,感受傾向,操作傾向¹⁰⁾,更には自己教育性促進の経路の理解(結語で詳述)も可能になる。「受講者ノート」はこうした個別の学習者理解を可能にし,教授・学習過程成立の条件を充たすことになる。

2 教授・学習過程成立の「三方向のコミュニケーションの原理」

教授・学習過程における教師と学習者の相互交渉の手段としてコミュニケーション活動がある。坂本昂は,授業を教師や教材を含む教育環境とコミュニケーションによる行動変容の過程と捉え,そこに本質的で単純な三方向のコミュニケーションがあるという。「いって,かえって,またいく」という平易な表現による三方向のコミュニケーション活動の維持は,授業成立には不可欠である¹¹⁾。「受講者ノート」はこの教授・学習過程成立の三方向のコミュニケーションの維持を可能にする。

3 教授・学習過程成立の「自己教育の原理」

教授・学習過程の目的は学習者の自己教育の増進にある。本来,授業とは教師の伝達過程に触発された学習者の発達過程にあり,授業の目的は学習者自身が自己発達を遂げる自己教育力の育成にある。梶田叡一は自己教育性を構成する要素として基本的な四側面・七視点をあげている¹²⁾。その四側面とは「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」「学習の技能と基盤」「自信・プライド・安定性」である。「受講者ノート」は,学習者が内に持つこの四側面に作用し,自己教育性の促進を可能にする。

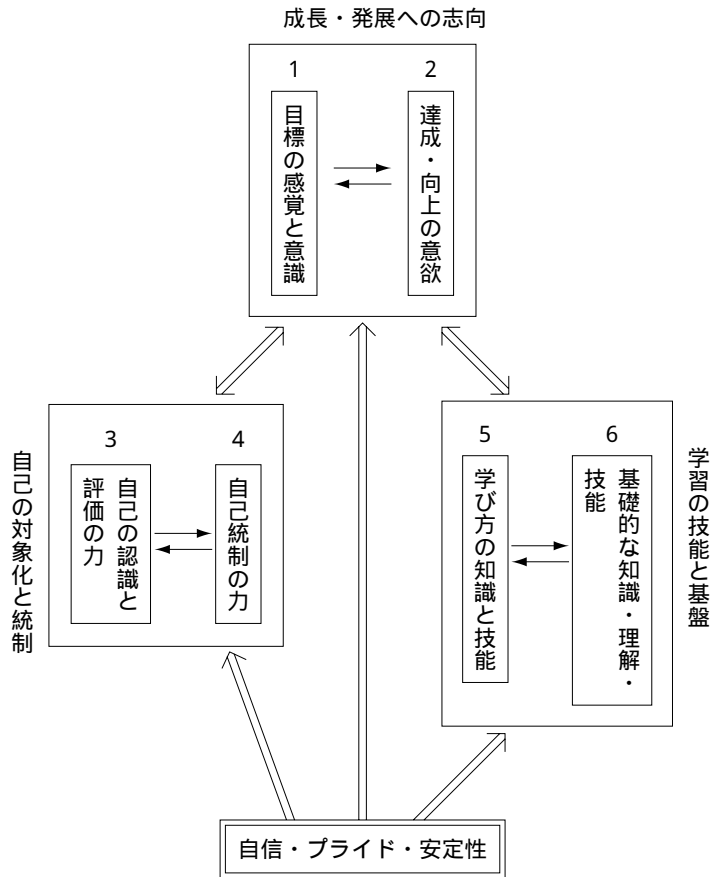


図1 自己教育の構えと力 主要な諸側面

4 教授・学習過程成立の「自己学習の原理」

教授・学習過程の目標は学習者の自己学習の増進にある。自己学習とは「学習意欲と学び方の習得」である。自己学習と自己教育の違いは自己教育が「学習意欲と学び方の習得、生き方の探求」という陶冶と訓育の統合の概念であるのに対し、自己学習は訓育を含まない陶冶の概念をいう¹³⁾。具体的には、学び方を学びつつ、当面の学習課題の解決に取り組む意欲、能力である。「受講者ノート」は、その学び方にかかわる「問いを立てる能力」の涵養を可能にする。

5 教授・学習過程成立の「学習集団成長の原理」

教授・学習過程成立の環境として学習集団の整備・成長がある。学習集団とは「共通の目的をもって相互作用をする成員の集まり」である。目的もなく集まるインフォーマルの集団や上からの強制によってできるフォーマルな集団とは区別される。学習という共通の目的のもとに一定期間、相互作用をもつことにより、成員間に心理的一体感と自己の行動基準を方向づける作用を持つ集団をいう¹⁴⁾。「受講者ノート」が対象とする受講集団は、初等、中等教育における学級・学習集団とは異なる短期の集団である。生活場面はなく、目的的に集うに過ぎない成員相互の関係が希薄な学習集団である。「受講者ノート」はその受講集団の成長とモラルの高揚までを可能にする。

(2) 「受講者ノート」活用による学生の論述基礎力の育成

講義科目の中で学生の論述基礎力の育成を図るには、まず、講義内容の理解の叙述が前提になる。学生の主体的思考の尊重とはいえ、講義テーマ・講義内容から逸脱した叙述を認める「受講者ノート」になってはならない。通常の講義時間における学生の論述基礎力支援の在り方は、講義内容の理解の深化と発展に資する過程で構想される必要がある。そこで、毎時の「受講者ノート」の記述をその指導、支援の場ととらえ、記述内容の評価は積極的に行い、その蓄積を通して論述基礎力向上を目指すことにする。具体的には、個別の「受講者ノート」に毎時、助言の記述と合わせて、次の評価を示し各学生に自己の文章記述の課題の自覚を促していく。

- A マル：講義内容の理解のまとめと考察に優れる叙述。
- A：講義内容の理解のまとめと一部考察が見られる叙述。
- B：講義内容の理解のまとめが断片的に見られる叙述。
- C：講義内容の理解が不十分な叙述。
- D：講義内容とは無関係な感想、意見の叙述

Ⅲ 「初等社会科教育法」教育における「受講者ノート」活用の実践

1 授業計画の概要

平成18年度初等社会科教育法(通称「社会科教育1」)の前期授業は、次の計画で実施した。社会科の本質、性格、目的に関する内容は3回、社会科の教育内容に関する内容は4回、社会科の授業構成と評価に関する内容は4回、社会科教師の在り方に関する内容は2回である。まとめると次の通りである。

1 社会科の本質、性格、目的に関する内容

第1回「社会科の本質、性格、目的論」 第2回「学習指導要領の変遷と社会科の目標、学力観」 第3回「初期社会科と問題解決学習」

2 社会科の教育内容に関する内容

第4回「初等社会科カリキュラム論」 第6回「中学年社会科地域学習論」 第8回「高学年産業学習と社会科教科書活用論」 第11回「中学年単元構成教材開発論」

3 社会科の授業構成と評価の在り方に関する内容

第5回「社会科授業設計、授業計画作成論」 第7回「中学年事実認識指導論」 第9回「初等社会科歴史学習論」 第10回「社会科授業評価論」

4 社会科教師の在り方に関する内容

第12回「社会科放送教材活用論」 第13回「初等社会科教師論」

2 「受講者ノート」活用の実際

(1) 「受講者ノート」の配布と内容

「受講者ノート」で取り上げた学生の反応内容は、次の通りである。反応の内容項目の表現は筆者が行い、()内の数字は、その内容項目で掲載した学生数である。学生のノートは複数の内容項目での重複掲載は避け、関連のある叙述の一部、又は全文を取り上げることにする。なお、毎回、3クラス200名のノートのうち、公平を期し主として()内のクラスの学生を取り上げるが、内容項目に顕著に該当する記述が見られる場合は、他のクラスの学生のノートも加えることにする。

第1回「社会科の本質、性格、目的論」(金1クラス) 12名

- (1) 法治国家と社会科の目的 (6 名)
 - (2) 社会科の目的, 本質, 性格 (2 名)
 - (3) 学習指導要領, 指導書に見る「社会科と社会科学」の説明の意図 (2 名)
 - (4) 今日の授業の考察 (2 名)
 - (5) 評価 C, D のノートへの助言
- 第 2 回 「学習指導要領の変遷と社会科の目標, 学力観」(木 1 クラス) 11 名
- (1) 社会科の誕生と社会科の目的, 目標 (4 名)
 - (2) 初期社会科の内容 (3 名)
 - (3) 初期社会科の学習方法 (2 名)
 - (4) 初期社会科の特色 (2 名)
 - (5) 評価 C のノートへの助言
- 第 3 回 「初期社会科と問題解決学習」(木 2 クラス) 13 名
- (1) 初期社会科と系統学習の単元構成 (2 名)
 - (2) 初期社会科における問題解決学習 (4 名)
 - (3) 初期社会科問題解決学習の成果と課題 (2 名)
 - (4) 初期社会科問題解決学習の考察と経験想起 (5 名)
- 第 4 回 「初等社会科カリキュラム論」(金 1 クラス) 12 名
- (1) 学習指導要領発展段階の社会科 (3 名)
 - (2) 平成 10 年版学習指導要領の特徴 (2 名)
 - (3) 平成 10 年版社会科教科課程の課題 (4 名)
 - (4) 今日の授業についての考察 (3 名)
 - (5) 受講者ノート記述の助言
- 第 5 回 「社会科授業設計, 授業計画作成論」(木 2 クラス) 14 名
- (1) 授業の原理 (3 名)
 - (2) 授業設計の二側面 (4 名)
 - (3) 社会科授業成立の条件 (3 名)
 - (4) 社会科授業の中の教材, 資料の機能 (4 名)
- 第 6 回 「中学年社会科地域学習論」(金 1 クラス) 8 名
- (1) 地域のとらえ方 (3 名)
 - (2) 小学校地域学習の系統 (3 名)
 - (3) 中学年地域学習の目的, 意義 (2 名)
 - (4) 受講者ノート作成のポイント
- 第 7 回 「中学年社会科事実認識指導論」(木 1 クラス) 13 名
- (1) 地域教材開発の手順 (2 名)
 - (2) 高知市の水道事業, 給水系統区域の教材化 (3 名)
 - (3) 社会科における三つの知識 (4 名)
 - (4) 今日の授業と経験想起, 自己課題 (4 名)
- 第 8 回 「高学年産業学習と社会科教科書活用論」(木 1 クラス) 13 名
- (1) 地域の自然環境とくらしの関係 (2 名)
 - (2) 第 5 学年の目標と内容 (2 名)

- (3) 社会科教科書教材の機能(4名)
- (4) 単元「自動車工業のさかんな広島」の年代別扱いの変化(5名)
- 第9回「初等社会科歴史学習論」(木2クラス) 11名
 - (1) 小学校歴史学習の目的(2名)
 - (2) 小学校歴史学習の特色(3名)
 - (3) 第6学年社会科歴史単元の扱い(1名)
 - (4) 第6学年単元「15年続いた戦争」事例の考察(5名)
- 第10回「社会科授業評価論」(金1クラス) 13名
 - (1) 社会科授業評価の目的(2名)
 - (2) 社会科授業コミュニケーション分析による評価(2名)
 - (3) 社会科授業結果の診断・評価の方法(5名)
 - (4) 社会科授業の定性的評価と定量的評価(4名)
- 第11回「中学年単元構成教材開発論」(金1クラス) 12名
 - (1) 社会科授業定性的評価と定量的評価の特性(1名)
 - (2) 中学年の学習指導要領の内容構造(3名)
 - (3) 広島市の特徴ある地形と中学年の単元構成(3名)
 - (4) 今日の授業と経験想起,自己課題(5名)
- 第12回「社会科放送教材活用論」(木1クラス) 20名
 - (1) 学校放送と放送教材特性(3名)
 - (2) 社会科放送教材と教室教師の役割(2名)
 - (3) 放送学習と放送利用学習(2名)
 - (4) 放送教材「保健所の仕事」の内容の考察(6名)
 - (5) 演習「保健所の仕事」の扱い,5つの発問の反応(7名)
- 第13回「初等社会科教師論」(木1,木2,金1クラスA4用紙4枚) 32名
 - (1) 新教育課程に立つ社会科教師像(6名)
 - (2) 本講義テキスト「社会科授業実践学研究」著作の意図の考察(3名)
 - (3) 本講義授業者への評価(7名)
 - (4) 「受講者ノート」作成の意図の考察(16名)

(2)「受講者ノート」で取り上げた主な反応の内容

「受講者ノート」で取り上げた学生の反応内容の主なものは、次の6項目で表1の通りである。また、授業内容別に6項目の掲載状況を見ると、表2の通りである。印は講義内容に直接該当するもの、印は講義内容に関連するものである。

3 「受講者ノート」の活用の結果と考察

(1)「受講者ノート」で取り上げた主な内容の結果

「受講者ノート」は、講義内容の受けとめの傾向を表している。取り上げた主な内容の結果は次の通りである。

- ア 学生の主な反応内容は、4つの授業内容(社会科の目標,内容,授業方法,教師の役割)と授業経験の想起,自己課題を含む6項目にまとめられ,ほぼ類似の掲載回数になっている。特に,教師の役割,授業経験の想起,自己課題に関する記述は毎回見られる。(表1)

表1 「受講者ノート」で取り上げた主な反応の内容

学生の主な反応の内容	掲載回数	掲載箇所
ア 社会科の目標, 性格, 特性	9	第1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9回
イ 社会科の内容, 教材	9	第2, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 12回
ウ 社会科の授業, 評価	11	第2, 3, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13回
エ 教師の役割	13	第1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13回
オ 授業経験の想起	13	第1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13回

表2 講義内容別の主な反応内容の掲載状況

主な授業内容	ア 社会科の 目標性格	イ 内容, 教材	ウ 授業	エ 教師の 役割	オ 授業想起	カ 自己課題
1 社会科の目標, 性格						
2 社会科の内容						
3 社会科の授業構成		○				
4 社会科教師の役割			○			

イ学生の主な反応内容を授業内容別に見ると、4つの授業内容には毎回、中心となる項目を含む上記の6項目の反応内容が見られる。(表2)

(2) 「受講者ノート」活用の結果の考察

授業で取り上げた4つの授業内容は、受講者自身で内容の相互関連を図り、体系化して認識していくことが望ましい。学生の叙述が当該内容に留まらず他の授業内容とも関連していることは、各授業内容を有機的に受けとめていることを表している。学生は「受講者ノート」で授業内容を整理し、構造的に把握する機会を得ていると考えてよい。「受講者ノート」は自己教育性の四側面の「学習の技能と基盤」の活動を促していると言える。

各授業内容で授業経験の想起、自己課題の叙述が見られるのは、学生が授業内容を自己とのかかわりで把握していることを表している。自己の学習経験を対象化し授業で得た認識を手がかりに自己課題を持ち、自己の在り方を考える取り組みは自己教育性の側面「自己の対象化と統制」に相当する。「受講者ノート」は学生に自己教育性の側面の活動を促していると言える。

各授業内容において社会科の教師の役割に関する記述が見られるのは、教科指導に当たる教師の役割を学生が意識して受講していることを表している。「受講者ノート」は自己教育に必要な目標意識・発展への志向性、即ち、自己教育性の四側面の「成長・発展への志向」の活動を促していると言える。

以上の結果は、従前の他の学科目の授業実践においても見られた傾向である¹⁵⁾。

4 「受講者ノート」の原理、機能に関する学生の意識

(1) 「受講者ノート」の原理、機能に関する意識調査の実施

「初等社会科教育法(通称,社会科教育1)」における「受講者ノート」の活用について受講学生を対象にアンケート調査(無記名)を実施した。そこでは、「受講者ノート」の原理、機能に関する項目の回答とその理由について調べた。一部、平成14年(2002)年度以降の回答(記名記述)も合わせて記すと次の通りである。

表3 「受講者ノート」の原理、機能に関する学生の意識調査結果

2006. 7. 20調査

平成18年度前期「社会科教育」受講クラス 受講者数	木1 56	木2 83	金1 64	計 203
「受講者ノート」の原理				
1 個別の学習者理解	36	63	42	141
2 三方向のコミュニケーションの維持	29	56	33	118
3 問いをつくる能力	10	21	11	42
4 自己教育性の促進	29	57	32	118
5 受講集団のモラルの高揚	12	39	25	76
「受講者ノート」の機能				
ア 自己表現活動	21	43	19	83
イ 他者表現の受容活動	36	42	39	117
ウ 学習意欲	27	48	31	106
エ その他	5	13	8	26

1 個別の学習者理解に関する記述

- ・先生が一枚一枚丁寧に添削してくださっているのがすごくよく伝わる。
- ・私の理解度をしっかり把握してくれていると感じる。自分が授業に参加して先生もそれを認めてくれている。やる気が出る。
- ・「あなたは前よりよくなってきている」と言われ、まさに一人一人を理解している。
- ・筆跡を見れば私に分かるという。私個人も見ている。
- ・直接、お話ししたことはないが、授業中、先生と目が会うと私を認識してくれている気がした。大勢の中の一人ではなく、個人として見てくれている気がして親近感を覚えた。
- ・平成14年度：講義で嬉しかったことは、学生一人一人を理解しようと努力されている姿。「受講者ノート」をしっかり読んでくださり意欲ができました。(H.Y)
- ・平成18年度後期：この講義で初めて“自分を見てくれる”先生に出会えた気がします。「受講者ノート」は自分の理解度を客観視でき、妥協を許さないきびしい評価にはときどきしましたが、私のやる気の源でした。(Y.S)

2 三方向のコミュニケーションの維持に関する記述

- ・毎回、コメントが書かれ、「見てくださったんだな」と実感する。
- ・受講者ノートを書き、返答を読み、また学ぶことができると強く感じる。
- ・常に見られている意識、講義を聴かなければいけない意識を与えてくれている。
- ・平成14年度：大学の講義は「行って」が主ですが、この授業は「返って」「また行く」があり本当に頭を使います。「人間は見つめられるときれいになる」。謎が解けました。(H.S)
- ・平成16年度：「受講者ノート」。先生が私達の見えていないところでコミュニケーションをとってくださっているのだと改めて感じました。(Y.Y)
- ・平成18年度後期：教師は一对多数の中で児童とコミュニケーションを取らねばならない。児童との交流、評価によって児童の目標意識や自信を獲得させ、そのやる気が授業集団の一体化も図る。「受講者ノート」は素晴らしいと分かった。(S.Y)

3 自己教育性の促進に関する記述

- ・目標意識、自己を対象化して見る、基礎学力の習得、自分に対する自信・プライドがこの

ノートで全て出てきた。

- ・書くことで自己を見つめ、授業を見つめ、より一層勉強しなくてはと思った。自分の勉強不足を理解したと同時に自分からもっと勉強しようと思った。
- ・受講者ノートを書くことで自らの能力や他人の考えを知ることができる。これによって今後、身につけなくてはならない資質や知識・技能は何であるかを理解し、積極的に学習に取り組むことができる。
- ・平成17年度：今日の講義で何かを掴もう、学ぼうと聞く姿勢、臨む姿勢が意欲的になり、最後にまとめることで理解を深く確かなもの、自分のものとするのができた。意志をもって授業に臨み、理解を文で表す大切さを感じた。(T . T)
- ・平成18年度後期：単に私達の理解、書く練習のためだと思っていたが、知らない間に、毎時間、目標と意欲を持って講義に臨むのができた。(K . Y)

4 問いを立てる能力に関する記述

- ・「何について書くのか」「どのように書くのか」「なぜそうなのか」「これでよいのか」。問いがなくては考えることも表すこともできない。
- ・まとめていく中で、ここはどうだろう、だったらこれはと小さな問いが生まれてくる。
- ・傍観者的な授業態度ではそのままにされた問いが、先生に伝えたいという思いから考えてみるようになった。
- ・授業の中で疑問に思ったことをすぐに調べるようになった。
- ・平成17年度：「受講者ノート」を書くと思って講義を聞くと、「へえっ。～はどうなのかな」という自分の中の心の声を聞くのができた。(K . M)

5 受講集団のモラルの高揚に関する記述

- ・最初は大人数のため落ち着かない木2クラスだったが、回を重ねることでモラルが高まった。最終回は素晴らしい雰囲気。受講者ノートの力を感じた。
- ・受講者ノートを書くことで金1クラス全体が真剣に授業を聞き、考えることができていた。理想の授業だと思う。
- ・本当に集中できたし、とても好きな授業である。それは木1クラスの一人一人の学生の授業に対する意識が徐々によくなったからだ。
- ・平成18年度後期：大学でのあらゆる講義の自分の授業態度も振り返るきっかけとなった。授業集団のモラルの高まりが教師になりたい気持ちを高めた。(Y . T)

ア 自己表現活動に関する記述

- ・最初は箇条書きのような文、13回を終え読み返してみると、読みやすく、まとまった文が少しは書けてきた。
- ・何を学び、私自身どれだけ理解しているのか、そして、理解したことをいかに自分の言葉で表現することができたかを見る目安になった。
- ・「書く」という行為は立派な自己表現。限られたスペース、限定された内容について自分の理解したことを表す。この一連の流れが論理的思考力を生み出す。
- ・平成17年度：書くことで自分の中で整理ができた。これからも分かったつもりで終わるのではなく、「書く」ということを大切にしていきたい。(T . S)

イ 他者表現の受容活動に関する記述

- ・自分の視野の狭さ、頭の固さに気づかされた。もっと成長しなければという気持ちになっ

た。

- ・他者のノートを読むと、自分に何が足りないかどのようにすればよいかよく分かる。
- ・まわりにはもっとすごい人、がんばっている人がいて、自分もやらなくてはと思えた。
- ・他人と共に自己が栄える「自他共栄」の精神が感じられた。
- ・平成18年度後期：自分は理解できて他者に理解させることは難しく文章の正確さや構成力が求められる。みんなの記述力は参考になった。(H.S)

ウ 学習意欲に関する記述

- ・先生が毎回、手書きでコメントを返してくれることで、その努力に負けない気持ちを持つようになった。朝の弱い私、全出席無遅刻はこの意欲のお陰である。
- ・しっかり聞いていないと受講者ノートは書けない。本当に、よいノートを書こうとしている自分がいた。
- ・受講者ノートのお陰で、1回の講義中、先生の話聞く、メモを取る、資料を読み取り理解、最後にまとめをするといったことができるようになった。
- ・整理しながら話を聞くことで、自然と授業に集中できた。
- ・平成15年度：受講者ノートを書くことで授業に対する姿勢が変わった。授業中からどんなことを書くか、どんな点が重要かを考えるようになった。(K.T)

エ その他

- ・授業の大切な所はどこか、中心となる所はどこかということが受講者ノートを書くにあたり分かってきた。他の授業でも役に立つ。
- ・教師になった時、自分もこのような活動をしたい。一人一人と向き合い、時間と労力を惜しまず授業づくりをし、何より子供の心を上に向かせたい。
- ・教師にとって大切なものや心構えが見えた。
- ・自分が一生懸命に書いた文章に先生も一生懸命に応えて手直ししてくれたお陰で、毎回、受講者ノートが返ってくるのが楽しくなった。この言葉ではない先生とのコミュニケーションを通して、うまく文章をまとめることができるようになった。自分も全力で生徒と向き合える教師になりたいと思えるようになった。
- ・平成14年度：教師の持っている知識を教えるだけが授業ではない。知識を子供が受け取り、その知識に対しての反応を生かしながら子供と共に授業をしなくてはならない。子供が接する肉親以外の大人としての人間的モデルも必要だ。(H.T)
- ・平成15年度：私は苦い思い出がある。ある教師は生徒の立場を考える様子がなく自分の世界に入る一方的な授業をされた。「教育は対象の理解に始まる」という言葉。受講者ノートに隠された秘密が明らかになった。(K.J)
- ・平成16年度：受講者ノートのねらいを聞いて、何でこの授業は眠くならないのか分かった気がした。ちゃんと先生が私達を見てくれている。充実感がある。(K.M)
- ・平成17年度：授業評価アンケートを前期、後期の終わりに書くが、先生ほど全体の流れが体系的、組織化されていたり、授業準備が十分であると心から思っていたのは初めて。私も子供の士気を高められる教師になりたい。(H.H)
- ・平成18年度後期：今まで12枚の受講者ノートを書いてきたが、最初はBやCの評価。他人のノートを見直したり授業を真剣に聞くようになりAやマルAをもらえるようになった。評価が上がると意欲も高まる。私も先生のように子供達一人一人のレベルを上げるような

授業づくりをしたいと心から思った。(N.S)

(2)「受講者ノート」の原理，機能に関する意識調査結果の考察

教授・学習過程には5つの原理が付随し、「受講者ノート」はその原理を起動させる機能がある。アンケート調査結果によると「受講者ノート」の原理について、学生は個別の学習者理解、三方向のコミュニケーションの維持、自己教育性の促進を認める回答が多い。これは教授・学習過程において、学生が「学習者理解の原理」「三方向のコミュニケーションの原理」「自己教育の原理」の充足を特に求めていることを表している。合わせて、教授・学習過程における「自己学習の原理」「学習集団成長の原理」が「受講者ノート」で充足されていることが分かった。

「受講者ノート」の機能では、「他者表現の受容活動」「学習意欲の喚起」を認める回答が多い。「自己表現活動」以上に「他者表現の受容活動」の機能を多く認めている。学生は大学授業においても「受講者ノート」による学習集団内の成員相互のかかわりを求めていることが分かる。このように学習集団の機能は高等教育の場においても受講学生から期待されていると言える。

その他の機能については教師の在り方を問う記述が多い。受講者は授業内容のみでなく授業方法、授業者の指導姿勢・態度にも関心を示していることが分かる。

5 「受講者ノート」活用による学生の論述基礎力支援の実際

論述基礎力支援の観点

従前と異なる本研究の目的に、既存の学科目内における学生の論述基礎力向上支援の究明がある。ここでは「受講者ノート」活用による学生の論述基礎力支援の観点として、次の4点を考えた。1つは、講義内容の理解の叙述の指導である。自己の内容理解は他者にも分かる叙述によって明確になる。そのための指導を実態に即して具体的に行う。2つは、講義内容の理解に基づく主体的な解釈、論理的表現の奨励である。各学生の適切な語彙、文節表現のよさを認め、独自の見方・解釈による叙述の展開を評価する。3つは、講義内容の理解の深化、発展として自己課題追究の奨励である。講義後半の演習レポート（地域教材をテーマとした授業計画書の作成）にかかわる自己課題発見の相互交流の場とする。4つは、本講義の受講姿勢・態度の向上にかかわる支援である。多数の受講者は当初から等しく高い受講動機を備えているとは限らない。個別の「受講者ノート」では消極的な態度の学生の飛躍の契機を探り、正確な叙述を認めた時には時機を逃さず「受講者ノート」に掲載することで叙述への自信と意欲の向上を図る。以上の観点に関する助言と上記四点にかかわる一部学生のノートを記すと、次の通りである。

(1)「社会科教育1」履修過程における基礎学力育成の支援

ア 「受講者ノート」におけるコメント掲載による支援の状況

第1回「社会科の本質，性格，目的論」 5 評価C，Dのノートへの助言

講義内容の理解を伴わない主観的な感想を先行させない。

講義内容の断片的，羅列的な理解の記述は不十分。文相互の関連に努める。

テキスト，資料を参考に用語は正しく使用。誤記は理解をあいまいにする。

講義テーマに基づく内容の理解の記述を心がける。テーマは飾りではない。

今日の「社会科と社会科学」の検討。何のためか。その意図を考えてみよう。

上記のノートのよさを今後の参考にしましょう。

第2回「学習指導要領の変遷と社会科の目標，学力観」 5 評価Cのノートへの助言

箇条書きのまとめは文相互の関連表記には不向き。 初期社会科には年の記入が必要

第4回「初等社会科カリキュラム論」 5 受講者ノート記述の助言

・文相互の関連を意識した記述。接続詞の効果的使用の記述が見られます。

第6回「中学年社会科地域学習論」 4 ノート作成のポイント

何についての記述か。文のねらいを明確にする。段落，小見出しの活用。

理解・説明の記述と意見・感想・経験の記述の調和。前者の後の後者の記述がよい。

正確な用語と文章の表記。箇条書き，略記，誤記は理解をあいまいにする。

丁寧な記名と書写は，自己の理解，思考を緻密にさせ，学力の増進に有効である。

第13回「初等社会科教師論」 5 「受講者ノート」作成の意図と謝意

新鮮な皆さんとの出会いの中で，よい授業に向かって互いに努め合い，最終回を迎えました。

輝く一人一人の皆さんの前途に希望を感じます。

イ 支援の結果の学生の反応

・13回書いてきた「受講者ノート」，友達は評価が上がりがくやしかった。頑張っけて聞くことにした。「受講者ノート」は集中して授業を聞くことを教えてくれた。(A.M)

・書くことで，講義を聞くだけでなく先生の言葉を自分の言葉に換えて表すことで再構築が為され，受けるだけの講義ではなく，自ら考える講義が受けられた。(K.M)

・「受講者ノート」がこんなにも私達の自己教育性を促進させ，授業内容への取り組みが主体的，意欲的になってきているとは初期には思いもしなかった。(K.M)

・「受講者ノート」により，自分の中での理解を説明できるようになると分かった。以前より深く社会科を理解できたと思う。(M.M)

(2)理解に基づく論理的自己表現の奨励

講義内容の理解に基づく独自の表現と論理的記述の奨励は，学生の文章記述に対する自信と意欲を高める。第1回のノートから積極的に取り上げ，評価することにした。

主な記述例

第1回：教育基本法と社会科の目標の共通点「平和的な国家，社会の形成者」から，社会科の目的は正に戦後の日本の目的だと感じた。(略)(S.H)

第10回：学習内容分析表を見ればどれが足りなかったか一目で分かり反省になる。定性的評価では教師の頭の中にぼやっとその評価が得られるのに対し，定量的評価は数字という目に見えるもので評価。定性的評価は授業のリアル感が得られる点はよい。(I.N)

第11回：(略) 授業は発展の中にもつながりがあり，知識がひとつの円のように児童に伝わるように展開しなければならない。(S.H)

独自の叙述で評価を得たS.Tのノート

第6回：「あなたはどこに住んでいますか？と尋ねられたら，「愛知県豊川市です」と答える。

この時，私の中では行政によって定められた地域である「形式地域」しか思いつかない。しかし，平野が広がり，豊川用水があるなどという地域内の様子を表す「同質地域」や，私が食べるものがよその地域から届いてくるという他地域とのかかわりを表す「結節地域」もある。豊川市は，ただ国の中で決められた範囲の中にあるのではなく豊川市独自の特色があり，それを明らかにするために「同質地域」や「結節地域」の見方・観点がある。これにより地域の本質が捉えられると分かった。

第7回：私は，毎日，水を利用しているにもかかわらず水がどのようにして私の手元にくるのか詳しく知らなかった。小学校の時，水道事業について学んだ時，先生は地図を示し「私達の

飲み水はここから届けられます」というものだった。なので、どうして年表資料や図表資料、白地図がいるのか疑問だった。しかし、それを合わせて見ると、「記述的知識」だけでなくどうしてそうなるのかという「説明的知識」、全ての場所でも言えるのかという「概念的知識」も考えることができ、より深く水道について知ることができた。

注、S.Tは第6回の「受講者ノート」の評価に自信を深め、第7回にも内容が良好で掲載。レポートもその内容を動機として「豊川市の水道事業～蛇口の水はどこから」を作成している。

(3)自己課題発見の場の設定

講義内容から自己の学習・研究課題を把握させることは講義の主要なねらいである。「受講者ノート」でも「今日の授業と経験想起、自己課題」という項目をたて、積極的にそうした記述をする学生を評価している。例えば、第11回「中学年単元構成教材開発論」では次の学生の記述がある。

自己課題発見の記述例

- ・ 私は岐阜県の揖斐川町に住んでいる。内容(1)の主な地形の自然環境は揖斐川、内容(2)の町の生産は揖斐川で取れる鮎の販売や養殖、主な就業先を除いて原材料、歴史性、他地域での評価など中学年の生産活動の条件は充たしている。内容(3)の健康な生活では町の水源としての揖斐川、内容(4)の安全な生活では先日起こった地滑りと私達の生活、内容(5)のくらしの変化では揖斐川が私達の生活とどのようにかかわってきたかという関連づけをすることができる。このように、教材開発は後の単元でも利用できる地域の地形の特徴を選択し内容(1)から内容(5)への関連を図ることが大切である。(O.M)
- ・ 私の地元の愛知県西尾市は抹茶の生産で有名である。重要な生産活動の条件は 原材料がある 歴史性ある 他地域で製品が評価されていることは当てはまる。しかし、 地域内の主な就業先であることは該当しない。そう考えると次世代の担い手が少なくなっていることに気づく。せっかく有名なのだから後継者を望む。私も西尾市民として貢献できるとよいと思った。(M.K)
- ・ 私の出身地は富山。富山といえば「鱒寿司」。富山は水がきれい。それに米の生産地であることから「鱒寿司」が名物になったのだと考えられる。地域の重要な生産活動の条件を充たしている。(A.N)

自己課題追求のO.Mのレポート

前述のO.Mは、演習課題のレポートを第3学年及び第4学年の地域学習の発展として第5学年単元「国土の環境を守る」を設定し小単元名「揖斐川町の環境保全」の教材開発と資料作成を行っている。その一部を記すと次の通りである。

・ねらいと動機

(略)人と人とのつながりが実感しにくい課題に対して地域学習の充実が必要。それを考えて選んだのが平成18年5月13日に揖斐川町東山で起きた「地滑りの」の教材化。この問題を捉えることで町の特徴を知り人と人とのつながりが認識できる授業づくりを心がけたい。国土の環境や人々のつながりの認識は児童にとって難しいがその概念を分かりやすく教示したい。(略)

・本文

単元目標：自分の暮らす地域の環境状況や環境保全活動の実態を理解する。

自分達の生活を振り返り、今後の生活で環境保全に務めることができる。

単元計画

- 第1時 揖斐川町と揖斐川の特徴：地図や年表で調べる。
- 第2時 揖斐川町の環境保全：町の地滑りの記事から環境保全の取り組みを知る。
- 第3時 揖斐川町と他地域のつながり：町の特産物と他地域のつながりを考える。
- 第4時 国土の環境：揖斐川町と日本全域を比較し、類似点や相違点を調べる。
- 第5時 公害とこれからの環境：公害の実態把握と自分達の課題を考えさせる。

学習指導案等は略

主な教材・資料

- 資料1 広報「いびがわ」2006 6月号 NO16「東横山地内で地すべり」
- 資料2 ワークシート 地滑りと理由 過去の県内の被害状況(1586 1968 1975 1999)
- 資料3 揖斐川町東横山の写真(平成18年6月25日の現場と遠隔操作の作業場面6枚)

・考察

教材研究を行うと知った時、最初に思いついたのが地すべりである。揖斐川町でもっとも最近起こった災害である。(略)教材研究は知識を何でもかんでも教え込むものであってはならない。如何にポイントを絞ってポイント同士を結びつけることができるかではないかと思う。実際に教材研究をしてみてその難しさがよく分かった。

(4)受講姿勢・態度の向上にかかわる支援と評価

「受講者ノート」は学生の受講姿勢・態度の実態把握に有効である。「文は人を表す」。受講姿勢と態度は筆跡、表記に表れ、内容理解を伴わない叙述は「受講者ノート」では即座に判別できる。一方、個別のノートの読みを重ねると理解を伴う真摯な表記の判読も可能になる。それを適切に評価すると学生の受講姿勢・意欲は向上する。過年度を含む今年度の学生のノートを記すと次の通りである。

K .Hの場合

第10回：学習活動分析カテゴリーは、授業の導入、展開、終末で用いられるカテゴリーが違うことに納得した。授業の起承転結、ふさわしい時にふさわしいカテゴリーで使用。「起」の時に高位のカテゴリーはおかしいし、「結」の時に低位のカテゴリーでもすっきりしない。まさに適材適所である。(K .H)

第11回：受講者ノートに自分の名前が載るとは思っていなかった。心の底から嬉しかった。今度もこのうれしさを糧に励んでいきたい。今回は中学年の内容構造を学んだ。「広島市の一員としての自覚」を持たせるためには、内容(1)を通し更に分割し内容(2)、内容(3)、内容(4)に分かれ、特別な位置に内容(5)、内容(6)が存在する。このどれも抜けてはならないこと。どれもが目標達成に不可欠な要因であることを再認識した。

第13回：私は先生の授業を最初は真面目に受けていなかった。一週間の内でも嫌であると思った。今、思えば損をした。腹が立つ心境である。先生が真剣に授業をしてくれていると肌で感じたのは久しぶりだった。それは「受講者ノート」のお陰であろう。私は自分の自己教育力の四側面 目標意識、自己の対象化、基礎学力、自信・プライド・安定性を「受講者ノート」で養い伸ばすことができた。先生の授業を真面目に聞き、ノートに真面目に書くからである。まさに先生のねらい通りである。教師とは、「生徒を伸ばしていく人材」であ

ろう。最初はひねくれて授業を受けない不真面目な私のような人間であっても、先生のような真剣な授業を聞けば必ず変わることを教えてもらった。(略)先生のような教師を目標としていきます。真剣な授業、生徒は必ず応えます。

注、K.Hは第7回の授業中の指名発言結果に自信を深めた。毎時、最後列で受講。受講者ノートの記名は大きく、書写は雑。これが第10回の受講者ノート掲載を契機に書写、及び内容の記述に変化が見られた。

H.M(高知大学・1994)の場合

第13回：新しい学力観のところで、その子のよさが発揮される、子供の自己実現に役立つという言葉が印象に残った。(略)大橋先生の授業を受けて、今までの講義に対する怠惰な面が認識でき、講義に対する見方が変わった。4月から7月の授業に毎週出席することによって、流れが見えてきて、完成されたものを受けとめることができた。感謝しています。

I.M(高知大学・1998)の場合

第12回：「私は、皆さんと共に授業ができてうれしいです。今日のこの先生の言葉にはとても感動しました。大学にきて初めて聞いた言葉です。(略)ある先生が、確かにその時、騒がしかったのもあるのですが、「君達のレベルには幻滅させられる。同じ国立といっても、京大、東大とは歴然とした差だね」と言われ、非常に悲しいやら、つらいやらという気持ちを最近味わいました。私は教師になってもならなくても、今日感じたような温かい気持ちを人に伝えられるような人になりたいです。

結 語

「社会科教育法」教育の教授方法の改善に関する研究として、授業における「受講者ノート」活用の更なる究明を図った。その結果、「受講者ノート」には学習者、授業者双方に次の機能を起動させることが明らかになった。学習者に対しては次の4点である。

1つは、「受講者ノート」活用による学習者にかかわる諸側面である。個別の学習者理解(学習者理解の原理)、問いを立てる能力の涵養(自己学習の原理)、自己教育性の促進(自己教育の原理)の充足である。授業に臨む学習者に対する自己存在感、自己学習状況、自己教育の構えなど個の学習に対する授業者の尊重、保障の取り組みが学習者の学ぶ姿勢、態度を旺盛にしていた。「受講者ノート」は学生の受講姿勢、受講内容、受講態度に深くかかわる学習条件を具備していると言える。

2つは、「受講者ノート」活用による教授・学習過程におけるコミュニケーション活動(三方向のコミュニケーションの原理)の充足である。授業は、本来、認識過程と社会過程の同時的過程であり、教師と学習者の社会的諸経験の交流が必然である。学生が授業の中で教師、及び学生相互間でのコミュニケーション活動に賛意を示すのは、この授業本来の在り方への願望である。

「教師の持っている知識を教えるだけが授業ではない。知識を子供から受け取り、その知識に対するの反応を生かしながら子供と共に授業をしなくてはならない」(前掲83頁 3平成14)とは学ぶ生徒の本心であろう。それゆえ、コミュニケーション活動が充足された授業では、授業進行に伴う「学習集団」の機能(学習集団成長の原理)が活発になる。やがて受講集団にモラルの高揚が図られていくのは、授業原理に基づく当然の結果である。「最初は大人数のため落ち着かない木2クラスだったが、回を重ねることでモラルが高まった」(前掲82頁 3)との回答は、

毎度の受講集団に見られる共通の反応である⁹⁸⁾。

3つは、「受講者ノート」は論述基礎力の基底をなすコミュニケーション能力向上の必要性を促している。授業中の生徒は、通常、「話す」「書く」のコミュニケーション活動を行っている。「話す」とは自己外対話、相手が見える社会的活動・自己活動である。「書く」とは相手が見えない社会的活動・自己活動である。元来、コミュニケーション活動とは社会的活動、その自覚が「話す」「書く」の自己活動を促進させている。人によく分かるように話すとは話す中身の理解の自己活動の深化、人によく分かるように書くとは書く中身の自己活動の深化につながる。授業終了十数分前まで自己内対話を続けてきた学生は、「受講者ノート」の機会設定により、書くことの社会的活動の自覚に目覚め、精度の高い論述に努めるようになる。「受講者ノート」の意識調査で学生が自己表現活動、他者表現の受容活動をよく認めたのはそのためである。「受講者ノート」では、他人と共に自己が栄える自他共栄の精神が感じられた(前掲83頁 3)とは授業における学生相互のコミュニケーション活動の意義の指摘、「受講者ノートにより、自分の中での理解を説明できるようになると分かった」(前掲85頁Ⅲ 3 M .M)の記述は、他者を意識した論述基礎力の向上結果の表明と言える。

4つは、「受講者ノート」活用による授業者・教職への関心の喚起である。受講学生はコミュニケーション重視の授業展開により、講義内容に留まらず授業構成の諸条件に対しても関心を顕在化させている。「教師にとって大切なものや心構えが見えた」「教師になった時、自分もこのような活動をしたい」(前掲83頁 3)との回答も毎度の受講学生に共通に見られる反応である。学生からの反応を求めない一方の授業展開を重ねていると、学生は講義内容にのみ関心を限定し、教授方法、教師の役割など授業構成に必要な事項に対する問題意識や研究態度が当面の学習者(受講者)体験からは欠落していくのではないかとと思われる。

次に、授業者に対する「受講者ノート」の機能の起動である。筆者は、「受講者ノート」活用による講義運営を通して、授業における新たな学習者理解の側面と授業原理の再確認・検証を行うことができた。

まず、授業における新たな学習者理解の側面として、「受講者ノート」には過去の学習経験・生育暦を表出させる一面があることが確認された。全授業、13回の個別の記述内容を自己教育性の四側面のカテゴリーで分析すると、学習者の中には記述傾向に特色があることが分かった。即ち、学生の自己教育性に関する記述の経路には、およそ3つのタイプがあることが推理された。1つは、「目的、内容優先記述型」。知的好奇心が旺盛で過去の学習経験・生育暦から現在の学習状態に至るまで心理的に安定していると思われる学生の記述である。自己教育性の四側面のうち、授業目的・理念などの側面の目標意識に関する記述や授業内容・教材などの側面の学習内容に関する記述が多く、の側面の自己を振り返る経験想起・自己課題に関する記述やの側面の自信・安定性、つまり自己の「受講者ノート」への支援・掲載を喜びそれを動機とする記述はあまり見られないノートである。

2つは、「自己優先、目的、内容記述型」。自己主張が旺盛で過去の学習経験・生育暦から現在の学習状態に至るまで心理的に安定していると思われる学生の記述である。自己教育性の四側面のうち、経験想起・自己課題などの側面と授業目的・理念などの側面、授業内容・教材などの側面の学習内容に関する記述が多く、自信・安定性の側面の記述、自己の「受講者ノート」への支援・掲載を喜びそれを動機とする記述はあまり見られないノートである。3つは、「安定優先、自己、目的、内容記述型」。「受講者ノート」における教師の個別の助言や「受講者ノ

ト」への掲載により自信を回復，学習意欲の向上が見られた学生の記述である。自己教育性の四側面のうち，自信・心理的安定に関する記述，経験想起・自己課題，目的・理念，内容・教材の記述がそれぞれ見られるノートである¹⁷⁾。いずれも「受講者ノート」の内容を自己教育性の四側面で分析することにより，過去の学習経験・生育暦との関連を推理することができ，現在の学習者をより深く理解する手がかりを得ることができた。

「受講者ノート」活用による授業者への機能の起動，2つ目は，「受講者ノート」は授業者へ「教師と生徒の協同構成による授業原理」の効果を再確認，自覚させている。「受講者ノートのねらいを聞いて，何でこの授業は眠くならないのか分かった気がした」(前掲83頁K.M平成16)と記す学生の心境は，授業者(筆者)の心境でもある。授業成立を「教え学ぶ教師と学び教える生徒の協同活動」と捉え，教師の側の学びの側面，生徒の側の教えの側面の強化が真に授業内容を協同で創造，仕上げられていくとする論は至言である¹⁸⁾。筆者は長く，同一授業科目の授業を繰り返しているが，毎度，新鮮な緊張感を伴い新たな授業内容を手にすることができるのは，授業者(筆者)と新学習者との協同活動による授業成立の成果である。「答案は宝の山¹⁹⁾」と形容する高校教師の主張と同様，本来，学校教師の教授行為の目的とその教授行為の活力の源泉は学習者の反応・評価にあるのではないか。それを宝と見る見方を「受講者ノート」は筆者に示している。

1回限りの教育の純粋性とそこで得られる教育成果の客観化，即ち，「教育の純粋性と科学性」の二面を日々の教育・研究活動の中でいかに実現，実証していくか。今日，全ての学校教師に向けられている課題ではないかと考える。

註

- (1) 「平成16年度～18年度にかけての中学校教育実習の実習校の声(校長，教頭，教務主任等)」岐阜聖徳学園大学教育学部教授会報告資料 NO.10 1 平成18年7月19日
- (2) 各大学，学部の特徴を生かした授業実践の試みが報告されている。片岡徳雄・喜多村和之編『大学授業の研究』玉川大学出版部 1992年 146頁～209頁
- (3) 「全入時代母校が消える学校法人相次ぐ破綻」の見出しで近年の大学が抱える課題を特集している。朝日新聞朝刊2007年(平成19年)4月26日
- (4) 島田博司「授業中の私語」前掲書⁽²⁾ 66頁
- (5) 吉本均「講義法」奥田真丈，河野重男『現代教育学大事典』ぎょうせい 1994年 61頁
- (6) 「教育職員養成審議会カリキュラム等特別委員会審議経過報告」文部省 平成9年5月26日
- (7) 清水一彦「授業の活性化と学習の質的向上」『大学改革2010年への戦略』PHP研究所 1996年 173頁
- (8) 勝木渥「一方通行でない授業への試み」『大学改革 110の事例と提言』朝倉書店 1994年 404頁
- (9) 拙稿「『社会科教育法』教育における実践的指導の研究 「受講者ノート」の活用を中心として」高知大学教育学部研究報告 第1部 第49号 平成6年
拙稿「『中等社会科教育法』教育の教授方法に関する研究 「受講者ノート」の活用を中心として」高知大学教育学部研究報告 第1部 第55号 平成10年
- (10) 広岡亮蔵『現代の学力問題』明治図書 1979年 63頁
- (11) 坂元昂『授業改造の技法』明治図書 1980年 28頁
- (12) 梶田叡一「自己教育とは何か 基本的な四側面七視点について」北尾倫彦編『自己教育力を考える』図書文化 1987年 19頁～27頁
- (13) 川野辺敏(国立教育研究所)「自己教育力を考える」『教育けんきゅう』NO.14 広島県立教育センター 1986

年 3頁～10頁

「自己教育力」の概念は、中央教育審議会教育内容等小委員会審議経過報告(昭和58年)に始まる。川野辺はそれを受けて「自己学習力」との違いを陶冶と訓育の概念を用いて説明している。

- (14) 片岡徳雄「学習集団」細谷俊夫、奥田真丈『教育学大事典』第一法規 267頁～268頁
- (15) 前掲(9)「中等社会科教育法」教育の教授方法に関する研究 5頁～6頁
- (16) 拙書『子どもが生きる学校』ぎょうせい 2001年(平成13年)45頁～46頁
- (17) 前掲(9)「社会科教育法」教育における実践的指導の研究 16頁。ここでもそれにふれた事例をあげている。
- (18) 木下百合子『現代公民科教授の理論』教育出版センター 1991年 145頁
- (19) 宇津木大平(高校教員)「答案は宝の山教師が採点を」朝日新聞朝刊『声』2007年(平成19年)4月11日
答案には指導上大切な情報が含まれており、全国学力調査の採点は教師が行うべきだと意見を述べている。

